

新刊紹介

真宗史概説

赤松俊秀・笠原一男編

真宗史の研究は、はやくから開かれた分野であり、村上專精、山田文昭、橋川

正、中沢見明、辻善之助、日下無倫、藤原猶雪、長沼賢海、鷲尾教導氏らのすぐれた業績がある。そうした業績の上に研究はさらに深められているが、注目すべき新しい研究の動きは、真宗の教義や教団の問題を宗教史的、政治史的、社会的な諸背景との関連において、有機的にとらえ、究明しようとするものであり、すぐれた成果をおさめている。ことに社会史や経済史の立場から、真宗教団に対する関心が集まり、教団形成の政治社会的背景や、教団の組織機構と社会経済の構造の分析が進められた。その結果、教団史はもとより、教理思想も時代の政治的、社会的、経済的、文化的な諸条件をぬきにしては、その意味と内容が十分に理解できないことを改めて示してみせた。

いまや真宗史は日本史の一環として有機的に把握され、大系的な位置づけがなされねばならない。そういう見解からこれまでの研究成果を基にまとめあげられたのが、本書『真宗史概説』である。

本書の構成内容は、おおよそ次のようである。

〔序章〕 歴史学としての真宗史研究の立場と意義について述べ、真宗史研究について回顧し、展望する。

〔第一章 鎌倉仏教の成立〕 荘園制の成立と発達から武家社会の成立に至る社会経済の展開過程を素描し、仏教としてあるべき姿態への復帰をめざした鎌倉仏教の最大の課題は、神道との関係をいかに規定するかであり、その自覚は鎌倉仏教の本質である専修の性格によつて特に促進された。そして専修の性格の形成の時期として、耕作農民が荘園か公領のいずれかに専属しなければならなかつた時と、武士と郎党の間に忠誠と保護の契約が結ばれ始めた時との二つの時期を指摘する。また源信から源空への浄土教の展開とその文化的背景について概観する。

〔第二章 親鸞とその教団〕 親鸞の主

な事蹟について問題点を整理し、特に東国社会と親鸞をめぐる門弟の動向を背景に、親鸞の教説とその立場を説明する。

〔第三章 真宗諸派の発展〕 親鸞歿後の関東における高田、横曾根、鹿島、大網門徒の動勢、本願寺の成立、覚如と存覚の義絶をめぐる問題、仏光寺の発展、錦織寺や越前三門徒の起源等について述べ、その史的意味と役割にふれる。

〔第四章 本願寺教団の発展〕 覚如から綽如にわたる本願寺の地方進出の素地の上に、存如や蓮如がどのように教団を拡張していつたかを神祇観の問題や時宗との関係を中心に述べ、室町戦国期の本願寺教団の発展を概観して、さらに地域別に畿内、紀伊、東海、北陸、東国、四国九州における教勢と教団の発展についてのべる。また真慧を中心とする専修寺教団の発展と一向一揆の政治的、社会的経済的な必然性について述べる。

〔第五章 一向一揆〕 富樫政親と門徒勢の富樫幸千代打倒に始まる一向一揆が、国人や地侍らの門徒化のうちに政親と一揆の対立、越中の一揆、長享一揆へと転開し、国人・門徒農民結合による加

質の領国化に至る過程や、細川政元の動向と守護勢力の複雑な関係の中に起つた永正一揆の経過をたどり、ついで享禄の大小一揆の経過と天文の乱、織田信長の成長と本願寺の越前朝倉との和睦、本願寺の大名化と守護大名の接近、織田信長の上京と石山合戦、信長の長嶋一揆鎮圧越前平定と石山退城、一向一揆の解体等について述べる。

〔第六章 真宗教団の組織と経済〕 本願寺教団の組織基盤としての講と組の構造と機能や末寺道場主の門徒組織と経営の実際を分析し、社会組織との関係について述べ、また教団の統制組織としての一家衆の成立と門徒統制の機能について述べる。教団の経済的基盤は組織を通じて集まる志納金の義務化や畿内の商人門徒の活躍にあり、その上に吉崎御坊、山科本願寺、石山本願寺の繁栄が示される。

〔第七章 真宗における護国思想〕 護国思想とは、この場合は特に国家権力や支配権力に対する姿勢を意味し、ここでは親鸞、蓮如、実如、証如、顕如の場合をとりあげ、彼らがおのおのの門徒に対すすすめた支配権力に対する姿勢を、政

治的、社会的、経済的な秩序の変遷と教団の展開の上に把えて説明し、本願寺の掲げてきた王法為本の思想は、教団維持のための方便にすぎなかつたとのべる。

〔第八章 幕藩体制と真宗〕 近世初頭における東西本願寺分裂の経緯について諸説を紹介整理し、門末の所属をめぐる動向について述べる。次に幕藩体制確立により、真宗が外には幕府権力に屈従し、内には教団に対して専制的教権を確立する過程を述べ、さらに幕藩制崩壊期における諸派の動向について示す。

〔第九章 近世真宗教団の構造〕 近世における真宗各派の寺院の地域的分布情況と講の種々相や、寺講と宗盲人別帳の制度下における真宗の寺檀関係の諸相と機能、村落生活における道場、寺院や坊主の役割と地位について述べ、さらにその間における民間の信仰習俗の受容と混入について示す。

〔第十章 真宗教学の隆盛〕 幕藩体制を完成した幕府の政策による文教の機運隆盛に伴い、東西本願寺の学林、学寮の創設をはじめ、各派に学事機関とその職制が設置され、教学の隆盛について述べ

る。その学事機関は法主を中心に統制せられる集権的機構をもち、教学の統制を行うものでもあつたとし、異安心問題の象徴的な意味について述べ、妙好人についての歴史的社会的な意味づけもされている。また朱子学派や経世論家の排仏論に対する真宗の対応や、幕末維新期におけるキリスト教に対する真宗の批判や対策について述べる。

〔第十一章 絶対主義の形成〕 神道国教主義に基づく天皇制的絶対主義の形成期における神仏分離、廃仏棄釈、廃合寺問題をめぐる真宗の動向を述べ、三河、越前、信越の一揆の経過を語る。次に政府の大教宣布、大教院設置に対する真宗の政教分離運動や大教院分離運動の経過をたどり、近代において真宗が絶対主義的な国家体制と密接に結合して行く道程をのべる。

〔第十二章 真宗近代化の志向〕 真宗の近代化への志向は、信教の自由によるキリスト教との対等な場における交渉によつて促進せられたとし、真宗とキリスト教との交渉を思想、伝道、不敬事件、教育と宗教の衝突事件を中心に考察す

る。次に真宗近代化を教団機構の改革、辺地開教と海外布教、近代思想との関係の三つの面に把え、本山の改革、中間的本末関係の廃止、宗制寺法の制定、北海道、アジア、アメリカの開教、精神主義運動、新仏教運動、無我愛運動について述べる。

〔第十三章 現代における真宗〕 真宗諸派の近代的教育機構の整備改革と、地方の学校設立について述べる。次いで開教、児童保護、監獄教悔、救貧、社会教化等の社会活動とその意義をのべ、反省すべき点を指摘し、第二次大戦後の教団の民主化と再編成への動き―大遠忌待ちうけを通して真宗の将来について展望を試みる。

執筆者は赤松俊秀、石田善人、井上鋭夫、雲藤義道、笠原一男、柏原祐泉、金子昭式、北西弘、重松明久、竹田聴州、田村円澄、菅田慶恩、松野純孝、森岡清美、吉田久一の諸氏で、おのおの専門の部分を担当執筆している。本書の特徴はいわゆる通史としての平面的な叙述を避け、教団を中心に課題を設定し論述する方法をとっていることであり、真宗教団

史概論とでも称すべきものである。多彩な執筆者の面々が独自の視角から課題へ接近しながら、偏せず全体として調和が失われていない。教団史を中心とするものり豊かな真宗史研究の成果が、研究者達の手によつて整理され、一応、大系化せられた意義は大きい。待望の真宗史概説である。斯学にとざさる者はもとより、教団の現実と宗門の未来に関心を寄せる者の必読書である。本書編輯の苦心と執筆の労に対して敬意を表したい。

A5版・五二八ページ・図版二八・索引三一ページ・一九六三年八月平楽寺書店発行 定価二五〇〇円

(名畑)

アジア史研究 第二

宮崎市 定著

宮崎博士の論文集「アジア史研究」第三が刊行された。本書には太平洋戦争終了の昭和二十年から後、およそ五年間に公けにされた論文等二十篇が収められている。いま、それらの内容を略述するに、

ほど、次の如くなる。

○アジア史とは何か

アジア地域の歴史の進展を地域・時代の二つの面より大観し、アジア各地域の発展がいかに鄰接地域の動きと関連をもつものであるかを述べてある。博士は先に「世界史序説」(アジア史研究第二所収)において、歴史とは本来世界史たるべきことを高唱されたが、本篇はそれと密接たる関係をもつものであり、アジア史の正しい理解は、世界史的立場より眺めることによつてのみ始めて可能であることを、具体的例をもつて、重ねて明らかにされたものである。

○中国史学入門総論

中国では書物の多いことを、「汗牛充棟」という言葉をもつて表言する。事実書物の多いこと驚く可きものである。歴史関係の図書だけ眺めても、基本的なものととしては、古代より明代に至る迄の各王朝の正史としての二十四(五)史を筆頭に、通典・通志等の九通あり、類書あり、政書・地志、通鑑類等々実におびただしい数に上る。本項は、かゝる根本的書物について、いかなる種類のものがあ